

世界の課題 表現してみよう!

【高校生の部】最優秀賞 独立行政法人国際協力機構理事長賞

私たち女の子には1か月に一度、憂うつな日があります。それは生理です。突然始まってしまった時にナプキンを持っていなかったら、友達にもらったり、お店で買わなければなりません。日本では質の良いナプキンが低価格ですぐに手に入り、学校や仕事に行くこともできます。では外国はどうなのでしょう。私は昨年、インドから来日した留学生と友達になりました。二人で一緒にお茶を飲んでいたら彼女が生理になってしまったのです。私は持っていたナプキンを渡しました。処置が終わって戻ってきた彼女は、そのナプキンの質の良さに感動し、インドの生理事情について話してくれました。インドのある地方では宗教上、生理中の女性は汚れたものとされていて、台所で料理をするのも家の中で寝ることも許されずベランダで寝るとのこと。また多くのインドの女性たちはナプキンが高額のため、購入できません。お米が1キロ31円に対し、ナプキン20個入りが217円。だから不衛生な古い布をナプキン代わりにして処置するため、子宮の病気や感染症で苦しんでいるのだそうです。

2015年9月、国連総会で2030年までに達成すべき17の持続可能な開発目標SDGsが採択されました。その中には全ての人に健康と福祉を——世界の妊産婦の死亡率を10万人あたり70人未満に減らすとゴール3に記されています。しかし現在、開発途上国の妊産婦死亡率は依然として先進国の14倍にのぼります。それはおそらく医療の発展の遅れに加え、生理中の不衛生による子宮環境の悪化が強く影響しているのです。生理現象は誰にでも起こるにもかかわらず、生まれた国によって格差があるということを知りました。ある日は通学路で布ナプキンの専門店を見つけた。布ナプキンは繰り返し洗って使えるため衛生的です。日本全国約12歳〜50歳の人口は約2840万人。一人あたりのナプキンの年間使用枚数を240個とすると、日本では68億個のナプキンが使用されることになり、もしも使い捨てナプキンを皆が使ったとすれば、年間5万5000トンのゴミが出る計算です。しかも使い捨てナプキンの主な素材は石油由来のものから作られているため、使い捨てると地球の沢山の資源を使って捨てられていることになるのです。もちろんゴミを焼却する際にも多くのエネルギーを使います。繰り返し使える布ナプキンは地球の貴重な資源を大切に使うことにも繋がります。でも2030年まで、あとたった10年しかありません。今こそSDGsの達成に向けて私たち高校生も行動する時が来たのです。私の通っている高校では、この9月に家庭科の授業で生理用布ナプキンを作るのになっていました。私の学年は約2000人在籍しているため、少なくとも200枚の布ナプキンが完成することになります。それを国連と連携を図り開発途上国に送りたいのです。文化によって男性に生理のことを言えない

世界の生理事情から考えるSDGsの達成とは

私立玉川聖学院高等部3年 藤林彩乃(ふじばやし・あやの)さん

【中学生の部】最優秀賞 独立行政法人国際協力機構理事長賞

「輝く世界のために」
名古屋市立汐路中学校3年 大石理紗子(おおいし・りさこ)さん

フィリピンの高校生の「輝く」眼差しが私を変えた。
私は名古屋Y.M.C.A.で、フィリピン・イロイロ市タンバリザ村の映像を見た。「フィリピンでは1年間大学に通うのに5万5000円程度かかる。しかし奨学金制度を利用して大学に通っている学生は、奨学金制度により自分の夢に向かって勉強できることをとても感謝しながら楽しんでる。輝いた目をした彼らの写真と共にその事実は私の心を揺さぶった。私はどうだろう。当たり前のように学校に行き、当たり前のように高校や大学進学を考えている。そのことが

当たり前ではなく、恵まれたことだと意識していただろうか。なんだか恥ずかしくなってきた。同じ学生として何か自分にもできることはないだろうか。
私は幼少期から名古屋Y.M.C.A.の募金活動に参加していたが、ただなんとなく参加していたそれまでとは違う意識で、タンバリザ村の高校生の大学支援やその他の募金活動に参加するようになった。すると、自分のひとつひとつの呼びかけにより気持ちも大きくなり、呼びかけていた誰よりも大きな声で明るく呼びかけていた。募金活動を通し、様々な現実、そしてその力になることに関心を持つこと、持つてもらうことが大切だと痛感した。この経験をきっかけに、生徒会長でもあった私は、中学校で毎年行われる募金活動を、従来の生徒会執行部のみで行うのではなく、全校生徒が誰でも参加できるボランティア型の募金活動とする発案をした。まずは「何かの力になれること」に関心を持って貰うためだ。すると予想外の数の生徒達が参加してくれた。参加してくれた友人達には、「自分が募金を呼びかける立場にたつと、より

JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

JICAでは中学生・高校生を対象に、国際協力のあり方や、国際理解をテーマとした「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」を毎年実施している。2020年度の募集テーマは「世界とつながる自分」私たちが考えること、できること。中学生の部(応募数1万6956点)、高校生の部(応募数2万2762点)で、それぞれ最優秀賞、独立行政法人国際協力機構理事長賞を受賞した。エッセイ全文と受賞者の喜びの声を紹介する。

関心を持つことができるし気持ちも違う。また何か機会があれば参加したい」と声をかけられた。私は嬉しかった。そして自分から小さな発信をすることが大事だと気づききっかけになった。
国際協力と聞くと、とても大きなことをするように思える。だが、まだ中学生の私が日本にいてできることは本当に小さい。しかし見方を変えれば、身近にきっかけを作る機会はあると思う。私はこれからはできる限りのボランティアと小さな発信を続けていく。その上で大切にしたいことがある。それは現地の人の視点で考え、相手を尊重することだ。これはJICA海外協力隊としてジンバブエで活動された、中学1年の時の担任の先生から教えて頂いたことだ。相手の気持ちになって自分が力になりたいという思いやりの心が繋がっていくことで、世界中に笑顔になる人が少しでも増えてほしい。あの日見たフィリピンの子の目の輝きを胸に、両親や周りの人達に感謝しながら世界と繋がっていききたい。



視野が広がりました

素晴らしい賞をいただき、本当にうれしいです。書くときには自分が経験したことをそのまま、飾らずに伝えることを心がけました。今回の応募で、自分自身の視野も広がりました。将来は医師になりたいと思っていますが、世界で活躍できる職にも就きたいと考えるようになりました。世界で活躍する医師もいますし、ほかにもいろいろ探してみたいです。世界の問題に関心を持ってもらえるように、自分ができることを続けていきます。

声を上げることが大切



生理について語ることはまだタブー視されている面もあり、今どんな問題があるのか、男性も含めて多くの人に知ってもらいたいと応募しました。その内容が評価されたことがうれしいです。私自身、社会に出るときには生理休暇をきちんととれるところで働きたいと考えています。私は大学に進学しますが、リクルートスーツの多様化にも取り組みたいです。SDGs達成への道と同じで、声を上げていくことで社会が変わっていくのだと思います。

【寄稿】

エッセイコンテストに
応募した私たちは
今、こんな道を歩んでいます

1962年に「海外移住奨励賞」という名称でスタートしたエッセイコンテスト。その後、90年に現在の名称となった。過去の受賞者は今、どんな道を歩んでいるのか、お二人に寄稿いただいた。

大石しおりさん

1998年(中学生の部)審査員特別賞受賞
受賞エッセイ「返ってきたエッセイ」
(熊本市立帯山中学校2年在籍時)
2001年(高校生の部)準特選受賞
受賞エッセイ「スタートは歩み寄り」
(熊本県立熊本高等学校2年在籍時)



PROFILE
一橋大学で社会学を専攻。現在は非営利団体(教育NPO)のファンドレイジング部門でCRM業務を担当。寄付という善意のお金が動くことで、子どもたちの未来に希望が生まれ、社会により循環が生まれることを感じながら日々仕事をしている。

立ち止まって想像してみることを

異文化とは何でしょうか。中高生の頃の私にとって、異文化とは国家を超えた土地に根差した誰かの日常でした。わくわくする出会いや新しい発見です。大人になってから、異文化はすぐそばにあることに気づきました。油断すると見過ごしてしまったり、つい一部分を切り取って自分の理解に組み込んでしまうこともあります。
中・高生の頃、海外の旅先で出会った人と同じ景色を見て同じ気持ちになっ

たり笑いあったりしたものです。それは、自分が日常だと思っていることの意味を問い、相手と私が大切にしたい価値に気づくことでした。当時をふり返り、今あらためて自分と立場の違う人の気持ちを想像してみることが大切にしたかったと思っています。

藤目琴実さん

2001年(高校生の部)審査員特別賞受賞
受賞エッセイ「心の地球儀」
(愛知県立時習館高等学校2年在籍時)



PROFILE
NHK報道局ネットワーク報道部記者。取材のほか公式SNSの「中の人」として生活防災ツイッター(@nhk_seikatsu)やLINEアカウントを担当。大学時代はフィールドワークに明け暮れる。育休中の現在は夫の赴任地である中国・広州で1歳の息子の子育てに奮闘中。

モヤモヤを原動力に

当時の私は「国際」という言葉に漠然とした憧れを抱く高校生でした。期待とともに留学したマレーシアで民族間の軋轢や格差を目の当たりにして戸惑ったことを覚えています。

その頃は「モヤモヤする……」としか表現できなかった複雑な感情の正体を突き止めたいと、大学ではアジアの社会開発を学び、現地調査に通い詰めました。記者となつて10年あまりが経つても、モヤモヤは世の中への違和感や問題意識は取材の強い原動力です。遠い世界の出来事をどうやってリアルに感じてもらうか、伝える仕事の難しさを痛感しつつ模索を続けています。



ビデオブログコンテスト

テーマは、フィリピンにおいて日本やJICAの存在が人生に与えたこと。応募資格は18~24歳のフィリピン人で、大賞受賞者の副賞は日本への研修旅行。「COVID-19の影響が落ち着き、日本のJICAの“現場”を訪れることができたときには、その体験もビデオブログにしておこうと考えています」とバカニさんは話す。

受賞

サイクリング
作：ビクター・カリオナ・ジュニア



comment
自転車に乗れば、みんなCOVID-19の感染拡大に対抗できるし、よりシンプルな世界に戻ることができる。自転車は、筋肉も体幹も強くする。感染のリスクを軽減させるためにも自転車に乗ろう!

JICAフィリピン事務所のコメント

フィリピンの平和を脅かした2017年のマラウイ危機。その現場からの映像を若者が撮り、日本の文化である千羽鶴に思いをのせて平和を祈るストーリーに胸を打たれました。

アバター／デジタル漫画コンテスト

COVID-19の感染拡大に対して、世界をよりよく変える方法をテーマに作品を募集した。

平均年齢がおよそ24歳と、若い国、フィリピン。世界のSNSの首都と呼ばれる、ソーシャルネットワークワーキングサービス(SNS)やオンラインサービスを活用する人が多い。とくに若い世代は、自在にSNSを使いこなしている。情報があふれる中、その世代へJICAの活動を伝えるために、JICAフィリピン事務所は従来の広報を超えたアプローチを検討。若者を対象にビデオブログコンテストを開催した。「ユーチューブへの動画投稿などが身近なおもしろい表現が出てくると期待しました」とフィリピン事務所のアマンダ・バカニさんは話す。

周囲からの反応もよく、「コンテストの第2弾はあるの?」と尋ねる人も。日本やJICAへの関心が高まったと感じています

JICAフィリピン事務所
アマンダ・バカニさん

事務所のフェイスブックで告知し、作品の応募は非公開ユーチューブに投稿、受賞作品はフェイスブックで公開するなど、若い世代の動きや関心を盛り込みながら実施。さらに、日系企業の賛同を得て日本への研修旅行という副賞も用意した。そのかいあって、テーマも多彩でフィリピン事務所のスタッフの想像をはるかに超えるクオリティの作品が集まった。「どの作品も時間をかけてJICAのプロジェクトを調べたことが伝わってきました。なかにはプロジェクトの現場を訪れ、関係者の話を聞いて作品にまとめた人もいました」とバカニさん。

大賞
JICA：私の千羽鶴への答え
作：シャネファメル・P・アルマザン、プリンス・ロイド・C・ベソリオ
(ミンダナオ州立大学-イリガン・インスティテュート・オブ・テクノロジー)
comment
願いを込めて折る象徴である千羽鶴。政府軍と過激派組織の戦闘から内戦状態になったミンダナオの地方都市マラウイ。マラウイ危機と呼ばれるこの現場で、子どもの頃に願っていた平和に、JICAと日本は一つの答えを示してくれました。まだ完全なる平和とはいえませんが、JICAはマラウイだけでなく、宗教による分断を再構築するために協力してくれました。

ビデオブログコンテスト アバター／デジタル漫画コンテスト

フィリピンの人々、とくに若い世代にJICAの取り組みを知ってほしい。そう考えたJICAフィリピン事務所が仕掛けたのは、ソーシャルメディアを活用したコンテストだった。

漫画は、言葉だけでは伝わりにくいものを表現する強い力がありますし、読んでもらいやすいという利点があります。今回のコンテストは、応募くださった漫画家も、そのファンの方々も興味を持ってくださいました。そういった意味でも大きな意義があったと感じています



コミチ代表
萬田大作(まんだ・だいさく)さん

世界の課題 表現してみよう!

大賞
エブリシングイズ グッド!
作：いぬパパさん

国際障害者デー部門

JICAの広島県国際協力推進員として活動する羽立大介(はだて・だいすけ)さんが、青年海外協力隊 障害児・者支援隊員としてガーナの盲学校に赴任したときのエピソードを漫画化。障害の有無にかかわらず参加できるブラインドサッカークラブを立ち上げ、スポーツを通して子どもたちや地域の人々が変わっていった。



続きは



大賞
ペマの後に、続く者
作：伊吹天花
(いぶき・てんか)さん

国際女性デー部門

2015年にネパールで発生した大地震後、住宅復興に向けてJICAが協力した熟練石工を育成する訓練に参加し、実際に業務に従事した女性、ペマさんのエピソードを漫画化。女性が社会で働くことに偏見があるネパールで、ペマさんの熱意が周囲を変えていく様子が描かれた。

続きは



多くの人が幼い頃から慣れ親しみ、読んできた「漫画」。日本を代表する文化でもある。そこで、途上国が抱える課題を漫画でわかりやすく、多くの人に伝えられたいか、との思いから始まったのが漫画コンペ「国際協力まんが大賞」だ。SNS時代の漫画とその作者をサポートする企業コミチとJICAのコラボ企画で、3月8日の国際女性デーおよび12月3日の国際障害者デーに向けて、その背景にある課題をテーマに、エピソードに基づいた作品を募集した。応募総数は、両部門あわせて37点。JICAの担当者は、「当初、途上国を舞台にした漫画は描きにくいのではと心配しました。しかし、みなさんとても丁寧に描写してくださり、受賞作を選ぶのが難しかったです」と、作品の完成度の高さに驚く。漫画家からは「描いていて楽しかった」「少しでも多くの人に伝われば」との声が聞かれた。「私たちがコンテストに込めた思いを漫画家のみなさんが受け止めてくださいました」と担当者は喜びを語った。

国際協力まんが大賞

途上国の障害者や女性が輝くストーリーの漫画コンテストが、2020年に開催された。